ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　その日の午後。

　お昼を食べ終わった三人は、少し休憩した後、拓馬、良助、雅也の順番で、田島辰巳と練習試合を――まあ、いつものことだが――行うことになった。勝負自体は五分程度で終わり、その後三十分間は戦術指南及び今後の練習の方針を決めるのが、毎度のことだ。

　だが、この日は、雅也だけは違った。

「お前も、もう小学生になるんだな……」

　雅也が気絶したリオルを起こしている最中、田島辰巳がそう呟く。振り向いた雅也に、ふぅ、と息を吐いて、その目をジッと見つめた。

「あの日から、もう一年半か……」

「何のことですか？」

　訳が分からないというように、雅也は首を傾げる。そんな彼を見て、溜息を吐く田島辰巳。半ば諦めたように、口を開いた。

「いい加減、あの山で何があったのか、話してはくれないのか？」

「……何のことですか？」

　同じ口調でそう言う雅也だが、返答は一泊以上遅れていた。

　あの日、到底、戦いと呼べるものではなかったとはいえ、ジャックと戦った事を、そしてそのせいで死にかけたことを、雅也は手持ちのポケモン以外には誰にも言っていない。フシギダネを連れて帰ったものの、どういう経緯で出会ったのかは適当に誤魔化していたのだ。とはいえ、嘘をついているのは田島辰巳を始め、他の三人及びポケモン達にも何となく分かっていたのだが。よほどショックな事があったのだろうと、彼の心を気遣った道場の皆だったが、一年以上経った今でも話してくれないので、親の代わりの身である田島辰巳としては、実は少し傷ついていた。

「『強いポケモンに襲われた』なんて言い訳は聞き飽きたぞ？　本当は、何か別の理由があるんだろう？」

「……別の理由なんてありません。それが、本当のことですから――ご指導ご鞭撻、ありがとうございました」

　そう言うと雅也は、逃げるように道場を出た。もう何度も逃げられているので、田島辰巳も何も言わない。追いかけようとしたハッサムを手で制して、彼は再び溜息を吐いた。

　そして、入学式当日がやってきた。

　この間まで、大きく膨らんでいた蕾は、今はピンク色の花を咲かせていた。おそらく、今が満開のピークだろう。

　そんな中、式用の黒い服とランドセルに身を包んだ雅也は、緊張と興奮を同時に感じていた。足元には、彼の三匹のポケモンもいる。駅の中に入ると、同じような子供達がたくさんいた。皆、親子連れだ。

「ん、こっちだ」

　田島辰巳に手を引かれ、雅也は改札口を通った。そして、ホームを渡って出口へと向かう。てっきり電車に乗るものだと思っていた雅也は、少しガッカリしつつも、次に見えた景色に、思わず目を見開いた。

　でっかい。

　これが、雅也がここを見た最初の感想だ。ピチュー達も、同じことを思ったのか、固まっていた。青空の下、レトロな建物からモダンな建物、開放感溢れる広いグラウンド、そして何より、普段は決してお目にかかれないような数の人とポケモンが一度に目に飛び込んできたのである。

「驚いたか？」

　田島辰巳が面白そうにそう言うのを聞いて、雅也はただただ黙って頷くことしか出来なかった。

「一之上学校は、小中高大一貫校だからな。そりゃあ、びっくりしただろう。だが、驚くのはまだ早いぞ。ここに見えている人やポケモン、建物はほんの一部だからな」

　それを聞いて唖然とする雅也達を引っ張り、二人と三匹は中央に見える大きな体育館の中に向かっていった。

　新入生の数に驚いている間に、入学式は終わった。最早、お偉い方々が何を言っているのか、雅也は一切聞いていなかった。今彼の記憶に残っているのは、たまたま見つけた在校生の拓馬が手を振ってくれたことだけである。

恐らくは担任の先生であろうと思われる大人に何となくついていくと、あっという間に雅也は先生を見失った。『ケーシィのテレポートサービス』の看板を持っていた青年が近くにいなければ、彼は一生、自分の教室には行けなかったであろう。どうやら、迷子になった生徒のために、ああいうボランティアは至る所にいるらしい。

爆笑が巻き起こる中、教室にテレポートしてきた雅也は、顔を赤らめたまま黒板に貼られてある座席表から自分の名前を見つけて、教室の黒板に近い方の入口に一番近い席に座る。

「はい、これで全員揃いましたね？　皆さん、初めまして。私の名前は――」

　担任の先生は、雅也が席につくと、自己紹介を始める。さっき見失った大人だ。男の若い先生である。生徒の心を掴むのが得意ならしく、軽快なトークで笑い声が上がる中、ようやくバクバクいっていた心臓が落ち着きを取り戻した雅也は、ここで初めて、今日から同じクラスになる仲間達の顔を見渡した。

　まず彼が見たのは、隣の席の子だ。普通の外見の男子生徒である。目にかかるかどうかの長さの真っ直ぐな前髪に、雅也よりちょっと大きめの目。体は細っそりとしていて、一見すると虚弱な印象を受ける。

　次に目に付いたのは、ちょっと離れた所に座っている、ボーイスカウトの緑色の制服を着た男の子だ。教室の中なのにも関わらず、同じく緑色のキャップを取っていない。やや細めの目は強気に光っており、先生を睨んでいる。口角はニヤっと上がっていて、なんだかチンピラっぽい雰囲気を、雅也は感じた。

　その次に目に付くのは、彼の近くに座っている子達だ。キャンプボーイの後ろに座っているのは、やたらでっかいアクセサリをつけているせいで、シルエットだけ見れば髪型はツインテールに見える、何だか不機嫌そうにしている女の子。さらにその子の後ろにいるのは、黒髪ロングヘアーの、何だかポワポワとした女の子と、彼女の隣に座っている、一見すると女の子っぽい容姿をした、栗色ウェーブの男の子が、シルエットがツインテールっぽい女の子に何か小声で話しかけている。

「では、そこの君から、立って自己紹介をしましょう！」

　ボーッとクラスメイトを眺めていた雅也の耳に、そんな声が聞こえる。慌てて立ちあがった雅也は、暫く口をパクパクさせていた。

「えっ……と、僕の名前は――」

　その後、自分が何を喋ったのか、彼には記憶が無い。

　知らない間に座っていたことに気がついたのは、隣の席の子が立ち上がった時だった。

「……？」

　その時、雅也はその子の袖が、ちょっと腕とアンバランスに膨らんでいて、しかも少し長すぎることに気づく。座っていた時は、膝の上に乗せていた手が机の下にあったので気がつかなかった。立ち上がった今でも、袖のせいで手が見えない。袖の中に何があるのだろうと、思わず覗き込みかけた雅也だが、隣の子の口が開き、その動きを封じる。

「です。よろしくお願いします」

　落ち着いた、自分よりやや低めのその声に、雅也は暫く固まっていた。神楽と名乗ったその子は、雅也ににっこりと笑いかけ、席に座る。その瞬間、雅也の目に、袖の中にあるものがチラッと飛び込んできた。三個のダークボールだ。黄緑色を基盤とした、暗い緑色のラインが前から見ると『Ｘ』の字についているのが特徴で、ポケモンを捕まえる際は、夜にその真価を発揮するボールである。一般的に、夜に外へ出歩かない子供には、まず使わないボールだ。

　そんな物を持っているだけでも驚きだが、雅也を驚かせたのは、ボールの収納場所だ。一般的に、モンスターボールのホルダーは腰に付けるのが一般的で、出しやすさを考えても、間違ってもホルダーは袖の中にはつけない。恐らく服かホルダーは特注品で、出しやすくするために、袖は手にかかるほど長くしているのだろう。

　ダークボールを見た後、雅也は神楽の纏う雰囲気が、少し異様なものであったことを知る。ジャックみたいに危険なものではないが、田島辰巳とは違う、そんな感じを。

　神楽が一体何者なのかを考えている間に、この日は終わったのだった。